

## 東郷克美著『井伏鱒二という姿勢』

平 浩 一

いきなりやや脇道に逸れてしまいが、私は著者から、研究の道へ進むにあたって強い影響を受けたのはもちろんのこと、二十年前より、焼酎の飲み方から教育方法、そして歩き癖まで、すべて学（まね）ぼうとしてきた。その意味で、私が本書を評する「資格」があるのかどうか分らない。しかし、せっかくこうした貴重な機会を賜ったので、ここでは、そうした経緯を抜きにして書いていきたい。

正直に告白すると、ページ数だけで言えばそれほどの分量ではないにもかかわらず、本書を読了するのに、かなりの時間を要した。とにかく、限らない奥行きを感じさせる一冊である。（時代背景／精緻な実証／作家井伏のあゆみ／各作品の傾向／語りの方法／登場人物の動き）等々——それらすべてを横断する形で筆が進められていることは、優れた研究書であるのだから、今さら仔細に語るまでもあるまい。本書は、単にそれらを横断しているだけでなく、決定的に、切り離せない形で連関させているため、たった一ページを読むだけでも、果てのない奥行きへ誘われる（いざな）ような感覚を抱かせるのだ。気が付けば、ずっと同じページに逗留していたことは、読了までに数え切れないほどあった。

本書のタイトル自体が、そうした傾向を予見している。『井伏鱒二という姿勢』。もちろん「姿勢」という言葉は、随筆集『風貌姿勢』（一九四二・二、春陽堂）をはじめ、井伏が若い頃から好んで用いた言葉に基づいているのである。しかし、それだけに留まらず、平易でありながら、掴めそうで掴めないような、際限なく広がる意味を持つ「姿勢」という単語は、本書自体の果てのない奥深さをも示している。

そうした背景のなかで、本書を読み進めれば進めるほど、「井伏鱒二」と「姿勢」とが、もはや切り離せない形で接続されていく。いわば、「井伏鱒二という姿勢」という言葉を通してしか、「井伏鱒二」を想起できなくなるのだ。それは、井伏研究の端くれである評者などにとっては、たいへんな苦痛（プレッシャー）であると同時に、これ以上無い甘美な体験である。

また、『井伏鱒二という姿勢』は、著者が十数年前に刊行した『太宰治という物語』（二〇〇一・三、筑摩書房）と相俟って、無限の相乗効果を生み出していく。例えば、それを裏返した形で、「太宰治という姿勢」や、「井伏鱒二という物語」を考察した論は多々ある（特に前者は多い）。だが、著者の両書を読了することによって、「太宰治」は「物語」、「井伏鱒二」は「姿勢」という捉え方から、ほとんど逃れられなくなる。繰り返しになるが、それは、たいへんな苦痛（プレッシャー）でありながらも、研究の場で、めったに味わえない甘美な体験なのである。

タイトルだけをとつても、これだけの評になってしまう（これでも全く足りないくらいだが）。本書が、それほど深遠な「奥行き」

を持つことは、幾度強調しても尽きない。もう一言だけ触れるならば、『太宰治という物語』／『井伏鱒二という姿勢』という対を成したタイトルは、「井伏さんは悪人です」という言葉をもつて去った太宰、残された井伏に対しての、著者の最大限の（やさしさ）だと感じる。たいへん卑近な言葉になってしまいが、それ以外の言葉を想起するのも難しい。両書を読めば読むほど、その思いは、深まるばかりである。

さて、本書は、全一五章で構成されているのだが、実に多くの井伏作品が取り上げられている。代表的なところを挙げるだけでも、「幽閉」「山椒魚」「鯉」「夜ふけと梅の花」「屋根の上のサワン」「谷間」「朽助のある谷間」「丹下氏邸」「川」「さざなみ軍記」「集金旅行」「葉屋の雛女房」「多甚古村」「へんろう宿」「南航大概記」「花の町」「二つの話」「佐助」「山峡風物誌」「遙拝隊長」「黒い雨」「軋ノ津茶会記」「厄除け詩集」あたりになるだろうか。もちろん、これでも、ごく一部であり、その他、無数の井伏の随筆を含めると、よくここまで作品を、適切に接続・引用できるものだと、それだけでも感嘆、驚愕する。

それらの作品を通して、井伏鱒二が井伏満壽二（いふしすじ）であった福山中学五年生（一九一七年）の頃から、その逝去（一九九三年）まで、すべてを追っていく。これも一言で片付けるのは容易だが、途方もない射程である。著者自身が触れているように、その期間は、ソビエト社会主義共和国連邦の成立から解体までのすべてを包摂しているのだから。

これら多くの作品と長い活動を仔細に検証しながら、井伏の作

家としての出立、不遇の習作時代、プロレタリア文学との微妙な関係、「くつたく」の表出、独特な自己相対化の手法が浮き彫りにされていく。その後も、都会からの「逃亡」、「改稿」の意味、森鷗外の影響、戦時下の姿勢、国家と戦争への「抵抗」、太宰との交流・別れ、戦後の変貌、中州との関係、「黒い雨」における「たかいかの意志」、井伏への追悼——等々、様々な考察がなされていく。しかも、いずれも切り離しがたく有機的に連関する形で筆が進められているため、その概観を簡素にまとめるのは、非常に困難である。

研究の場においては、作家論・作品論・テクスト論・文化研究等をはじめ、多様な研究のスタンスがあるが、著者が、本書でそのすべてを横断し、連関させていることは、あらためて注目されねばならない。それは、著者が何よりも、作品に誠実に向き合おうとする姿勢に由来するものであろう。そうした姿勢があるからこそ、必然的に、様々なスタンスを自然と横断し得るのだと思われる。作品に誠実に向かい合うというのは、文学研究にとって、ごく当たり前のことも知れない。しかし、その当たり前のことを、研究の場で実践するのが、どれだけ困難なことであるか——。

こうした傾向を持つ本書に対して、評者は、気が付けば、非常に強く自己投影・感情移入しながら読み進めていた。今日では、より図式的で合理的な傾向の研究が増えつつあり、もちろん、そうした方向性も重要なのだらうと感じる。しかし、誤解を恐れずに言えば、自己投影・感情移入こそが、読解の（スタート）であ

り「ゴール」ではなかったか。本書を通じて、それをあらためて痛感させられた。特に、非常に長い間、様々なジャンルで活躍し続けた井伏に対しては、本書のような研究姿勢が、強く求められていた筈だ。

著者は、言わずと知れた井伏研究の大家であり、第一人者のひとりである（もちろん、井伏研究だけに留まらないことも周知の通りである）。本書に収められているのも、著者の井伏に関する研究成果のほんの一部に過ぎない。それは、本書巻末の「井伏鱒二関係諸文控」を見れば、一目瞭然である。

それら多くの論考はもとより、いわゆる『新全集』や、『井伏鱒二の風貌姿勢』などの編集は、著者近年の偉大な功績のひとつであった。個人的には、『井伏鱒二全集索引』（二〇〇三・三、双文社出版）は、特に必携の書であった。それらの仕事に本書が加わることで、井伏研究の礎石が完成されたと言えるだろう。これからの井伏研究者は、ここから、どのように考察していくかが、今後、強く問われていく。

評者自身、これまで幾度も、著者の主張を乗り越えようとしてきた。その度に痛感するのが、表面上では乗り越えたつもりでいても、結局、深淵の部分では、著者の主張を反復・補完しているだけ、あるいは、著者の主張に依存しているだけ、という思いだ。非常に新しいことを論じたつもりでも、後に読み返すと、著者の掌の上で踊っているだけのように感じる 경우가、多々あった。

——それも、至極当たり前のことである。これだけ深遠な研究を為してきた著者を、乗り越えるなどというのは、ただならぬこと

だ。しかし、若手（と呼ばれる研究者）にとって大切なのは、そうした深遠な研究があることを強く自覚しながら、それでも、その研究を継承しつつ、何が言えるか、深く煩悶していくことだろう。それを自覚するのとはしないのでは、大きな違いがある。

そういう意味で、一点だけ、本書に残念な部分があった。『太宰治という物語』には、多くの「注」が付されていたが、本書には「補記」はあるものの、基本的に「注」は付されていない。もちろん、先行資料や研究は、論中で適宜、非常に丁寧に引かれている。また、井伏研究の第一人者という点からは、「注」は必要無かったのかもしれない。しかし、敢えて「わがまま」を言うならば、やはり著者以降の研究について、批判すべき部分は厳しく批判して欲しかった。もちろん、それは、著者に対する強い（甘え）であることは、重々承知しているのだが。

いづれにせよ、著者が、これからも多く著書を刊行し、われわれのような若輩の研究者をより驚愕させ、極上の甘美な体験を与え、そして、これ以上ないほど困らせてくれることを、何よりもここに強く願いたい。——いや、私などが願わなくとも、著者は必ずそうしてくれるだろう。それだけは、心から信じて疑わない。

（二〇二二年一月 ゆまに書房 B6版 三七頁 本体二八〇〇円）